

テレビジョンの美学——日本万国博覧会と今野勉の 1970 年

松井茂（情報科学芸術大学院大学 IAMAS）教授

20 世紀において、見世物 (spectacle) といえば映画を経てテレビジョンに集約されたと考えられる向きがある。しかしテレビジョンは本当に spectacle なメディア装置であったのだろうか？ いち早くテレビジョンの美学を論じたのはウンベルト・エーコであり、これが『開かれた作品』(1962 年) の重要な起点であることは見落とされがちだ。同時期にテレビ・ディレクターの今野勉 (1936 年～) 等は、テレビジョンの美学を探究していた (と、いま現在振り返ることができる)。

今野は、日本万国博覧会 (通称、大阪万博) に際して、萩元晴彦、谷川俊太郎らと電気通信館 (電電公社のパヴィリオン) に参加し、ほぼコンテンツ無しの 4 元生中継をするだけの企画を準備した。日常の実時間を実時間のままに中継するテレビジョンの美学の実践は、祭でもなければ、見世物でもないと考えられ、開幕直前に決裂する。映像の博覧会として論じられることの多い大阪万博において、エキスパンデッドシネマなどが主催者、観客に好評を博した一方で、お茶の間に進出したテレビジョンの美学はなぜ排除されたのかを検証する。大阪万博と今野の関係性を通じて、テレビジョンというメディア装置の anti-spectacle な美学を、映像文化のオルタナティブとして検証したい。

他方で、今野らの定点カメラ的な中継計画は、この時期に登場した監視カメラとの比較も可能であり、現在に通じる論点がある (大阪万博は群衆管理の祭典でもあった)。2011 年にアナログ放送が終わり、SNS、動画配信、サブスクリプションの日常化が浸透した近年、無人カメラや生体情報にいたる議論の起点として、当時のテレビジョンの美学をパノプティコンに短絡しない語り直しによって、なんらか現在への批評的な議論を企図したい。